

有識者 林 暁甫氏(NPO法人インビジブル 理事長)

インタビュー概要

アートとまちづくりについて

- 市民ひとりひとりが主体的にまちをつくりだしていくというコミュニティを構築するうえで、アートは“触媒”としてそのきっかけづくりに貢献できる。そのまちづくりでは、行政だけでもアーティストだけでも駄目で、共感してくれる多くの市民の主体的な参画が必要。
- アートを触媒としたまちづくりを進めるうえで重要なことは、プロジェクト前後の状況を客観的に測定すること。測定がないとアートが与えた影響、変化が分からずじまいになってしまう。大きな成果を得るためには、様々な異なるセクターとの連携が不可欠。

コミュニティづくりとアートプロジェクト

- アートプロジェクトでは誰もが役割を持ち得るので、ひとりひとりの存在意義を証明できるメリットがある。
- 固定化されていた人間関係が、アートに参加することで、流動化されて、関係性が変わるところが面白い。

行政の文化芸術施策について

- スマホカメラ・SNSなど技術発展により誰もが文化芸術の創造に参加できるという今の時代を踏まえ、ハード・ソフト両面の施策を議論する必要がある。
- 時間をかけることが必要な教育分野は、文化芸術との親和性が高い。アートを通じて自主性を育む教育など、行政には長期視点に立ったアートを活かす仕組みづくりを期待したい。
- 文化芸術に関する施策では、施策を通じて先々にどのような社会を実現したいかを十分に議論したうえで、取り組む分野やテーマを決めていくべき。
- 福祉や産業振興など幅広い領域で文化芸術的アプローチの取組みを展開したらどうなるかを考えることを通じて、自治体がなぜアートに取り組むのかというメタな問いに対する答えが見えてくるのではないか。

千葉市の特性を活かした施策について

- 鑑賞型・体験型という区分けではバランスが重要。国際的に評価の高いアーティストを招聘したプロジェクトに取り組むことも大切だが、多くの市民が制作プロセスに携わるプロジェクトを企画することで、プロセスそのものから新たな価値が生まれてくる機会の提供も必要。
- 千葉市は成田空港からも東京からも近く、アーティストを滞在させるポテンシャルは高い。海外アーティストの間では日本への関心が高まっており、千葉市は受け入れ体制を整備すればそうした海外アーティストを呼び込める可能性が高い。